



実施者

＜教員＞千葉大学 特任専門員 / 地域コーディネーター 阿部 厚司

＜参加者＞千葉大学 国際教養学部 国際教養学科 4年 秋山 陽

＜協働パートナー＞

【行政】南房総市役所 市民課市民協働グループ

【企業等】ヤマナハウス

【個人】ヤマナハウス南房総三芳のシェア里山 代表 永森 昌志, 副代表 沖 浩志, マネージャー 溝口 耕一

1. 背景と目的

獣害は、特に農作物生産が経済の中心にある地域において、最重要課題の一つである。直接的な農作物被害だけでなく、営農意欲の減退や耕作放棄・離農の増加など精神的な被害や、自動車や鉄道との衝突などをはじめとする交通への被害が指摘されており、影響は多岐に及ぶ。

さらに、全国的に進む少子高齢化によって、猟師や農家をはじめとする担い手不足が深刻化している。担い手不足により、さらに柵の設置等での一人当たりの負担が増えたり、十分な補助金がでないなど、ヒトだけでなくモノ・カネの不足につながるおそれもある。

一方で、都市から地域へ注目が生まれてきていることも事実である。自分の生まれたふるさとや応援している地域に対し寄付をすることができるふるさと納税はその一例である。また、実際に地域において時間を過ごす二拠点生活やワークとバケーションを組み合わせたワーケーションなどが広く提唱されるようになってきており、コロナ禍によるテレワーク需要はそのような動きに拍車をかけることとなった。そのような流れを活かし、地域の獣害対策に地域外の人々の関心を集めることで、ヒト・モノ・カネの不足を解決の糸口が生まれるのではないだろうか。

南房総地域は、自然が豊かでイノシシやキョン等による被害がある一方で、東京や埼玉、神奈川など大都市圏からのアクセスがよく、地域外の人々に関心を持ってもらえるような獣害対策を行うフィールドとして最適であると考えられる。

2. 実施内容

(1) ヤマナハウスでの活動

ヤマナハウスでは、月例イベントやヤマナアカデミーなどの活動に参加した。具体的には、母屋周辺のインフラ整備や裏山の階段の整備、ゲルの整備など普段の生活ではできない貴重な体験をさせていただいた。また、刈り払い機を用いた草刈りやイノシシの解体のお手伝い、裏山におけるイノシシの痕跡の調査など、獣害対策に関

連した作業を実際に体験させていただき、その大変さを肌で感じた。これらの経験を通して、獣害対策を地域の中だけで完結させ、それを続けていくことがいかに難しいかをよく理解することができた。

また、ヤマナハウスを訪れる外部の人々に対して自分たちの活動を説明したり、自分たちがそのような人々向けのイベントを企画・運営する機会をいただいた。具体的には、ヤマナハウスのオープン月例で都会から来た人々と一緒に裏山で作業を行い、そこで準備したイルミネーションや焚火をその夜に楽しむというイベントや、ヤマナアカデミー参加者を対象に海老敷金比羅山において自分たちが企画したトレッキングツアーを実施した。自分たちが南房総で学び、魅力を感じたことを自分たちと同様に体感してもらうことができたと感じている。

(2) キョン革を用いた商品の製作

ヤマナハウスの活動でもお世話になっており、イノシシやキョンなどのジビエレザーの活用に取り組まれている大阪谷未久さんにご協力いただき、キョンの革を用いた車のハンドルの製作を行った。

キョンは台湾や中国では高級食材であり、またその革も非常に手触りがよく剣道の防具などで使用されることもある。しかしながら、キョンは特定外来生物でもあり、害獣として駆除されてしまう。駆除された個体を有効に活用できれば、収益や人々から獣害への注目を得ることができ、持続的な獣害対策につながる事が期待できる。

3. 成果と課題

(1) 地域貢献面

自分たちが南房総で活動する中で学ぶだけではなく、大学生の自分たちが感じる南房総の魅力を地域外の人々に伝えることができたという点が成果として挙げられる。参加者の方々からも「面白かった」、「楽しかった」、「また来たい」などのコメントをいただくことができ、少しばかりの自信もつけることができた。また、有害鳥獣の活用先の新たな提案をすることができたという点においても意義があったと思われる。しかしながら、今回は製作段



1 革を使った小物づくりの様子 2 ヤマナハウス月例イベントの様子 3 裏山の生物調査の様子 4 裏山頂上の整備の様子

域学協働の工夫！

- ★ヤマナハウスのイベント参加を通じ、様々な年齢や価値観、スキルを持つ人々と交流したことにより、視点を広げることができた。
- ★ヤマナメンバーの方々が一番寄りまで送迎を引き受けてくださり、時間を効率的に活用することができた。送迎の時間はコミュニケーションの場となり、関係性を深めることができた。

階にとどまっております、それをいかに売っていくかというところまで検討することができなかった点は今後の課題である。

(2) 教育・研究面

日本国内におけるキョンのほとんどが千葉県に生息しており、捕獲したキョンの活用の取り組み事例は多くない。その中で、革製品を多く用いる車のパーツをジビエレザーの活用先として検討したことは非常に意義のある取り組みであると感じている。今回はハンドルの製作にとどまったが、今後は内張りやシートなど質感が重要視される部分においてさらなる活用が期待される。

また、革の加工のためには鞣しなど時間のかかる工程もあり、生産量を増やすことが現状では難しい。克服すべき技術的な課題に対するさらなる検討の必要がある。

4. 今後の展開

今後の展開としては、先ほど述べた新たな商品の開発と、それをしっかり評価してもらうための売り込みの2点が挙げられる。今回製作したのは車のハンドルであり、車のメーカーやユーザーにキョンを含めたジビエレザーの良さを知ってもらうための機会を作っていくことが期待される。

さらに、1月下旬から2月末まで開催されている房総ジビエフェアのように、ジビエイベントとコラボしていくことで、イノシシと比べて認知度の低いキョンも含めたジビエレザーの利用を多くの人に認知してもらうことも進めていきたい。

*表彰・マスコミ掲載など
・特になし